

お葉 日 誌

大 關 德 道

薄暗い部屋の中でネオンが見据ゑるやうに動かず光つてゐるだけで、がらんとした部屋には昨夜の埃の積つたボツク
スだけが、だらしなく横はつて、この朝の空氣は風の過ぎた野みたいに荒涼としてゐる。剝げかゝつた金文字のは入つ
たガラス戸には、弱々しい日光が冷たさうに凍つて了つて、決してこの部屋を明るくして呉れない。その黄色に光るガ
ラス戸の上半部をよぎつて通る人の姿が、寒さうにかじかんでゐる。けれどもとても明るさうで、この部屋の暗さと
比ぶれば、死人と生人のやうな氣がする。

お葉は御飯が炊き上るまで、次々に通つて行く人の群を何の當もなく眺めてゐたけれども、昨夜の事を思ひだすと不
愉快だつた。

ねえ、さうぢやないの。だからさう云つたぢやないの。それをあんたは邪魔するんでせう。ねえ、さうぢやないの。
と、もうしどろになつた口調で、愛子がお葉を無理に立たした時、お葉は黙つて云ふ通りになつた。素面の時にはそれ

ほどでもないのだが酔ふと癖が悪くて、何かにつけて怒り散らす愛子に、お葉も始めの中は腹も立つたが、近頃ではそれほどでもなくなつた。ぶく／＼膨れ上つた手足と、お白粉の紫色に浮き出た大きな顔とが、奇妙な對象を形作つて、人間と云ふよりも獸に近い感じがしてならない。大事な客と思へばこそ相手をしてゐたのに、變に金錢上の事で邪推する愛子を、お葉は又かと云ふ氣持で軽く受け流しはした。けれどもたかがあんな汚い女給からでも恥づかしめられるかと思ふと決していゝ氣持はしなかつた。

お葉を呼ぶ誰かに覺まされたやうに、それから他のボツクスで酒を飲んで、始めて酔つた氣分になつたら、その不快さも忘れるともなく遠のいて了つた。が、今お葉はこの昨夜の不快さをもう一度反芻して、苦い茶を嚙むやうに、自分と云ふものを考へるのだつた。

お葉は懷手をしながら、ふつくらとした乳のあたりを子供のやうに押へて炊事場へ廻つた。そこは前よりも、もつと暗かつた。十五燭の電燈が夜晝つけつ放しで、其所に居ては天氣がいゝのか悪いのかさへ區別がつかない程だつた。お葉は始め來た頃、この薄暗い生活が、ぶくろの生活のやうな氣がしたのだが、段々と慣れるに従つて、そんな事は少しも考へなくなつて來た。それはこの事に限つた事ばかりではなく、三月もしない中に心も身体の感じも、みんなが非常な速さで變つて行くのが、自分でもよくわかつた。變るまい變るまいとは思つてゐても、それはやつぱし仕方のない事だつた。

十一時過ぎると皆別々に二階から下りて來ては、髪を梳かうともせず、顔さへ昨日のお白粉を落したまゝで、申し合せてやうに、火鉢を圍んだ。

——誰が云つたの、あたしやあんな氣障な奴あ嫌よ。

——さうぞ

——あたしの好きな人はね……

——士官さんでせう。

もうそんな事は耳にたこが出来る程聞いたと云はぬばかりに、女給の一人が半疊を入れると、むきになつて

——それがどうしたの。あたしや惚れてんのよ。もう近い中に歸るしね……

——そしたら、どうするの？

——さあ、急には何だけど……

——大層な御氣焔ねえ。ほゝゝ。

と、今下りて来たばかりの女給が、變な手振りでまぜつかへした。

お葉は、そんな會話を横で聞ひたまゝ、冷やかな位黙つて働いた。それが時々女給等に變な眼付で見られ

——まだなの、急いで頂戴な。あたしやぺこ〜なんだから。

と、置き所のない憂が、お葉に向けられた。

お葉は黙つたまゝ働き續けてはゐたが、心の中では、自分でしたら、どう、くらゐの事は云つてやりたかつた。

御飯をしまつてから、お葉はふと讀みさしの本を開けたけれども、讀むでもなしにばかんと坐つたまゝだつた。すぐ裏に屏風のやうな鐵筋のオフィスが建つてからは、太陽の光さへ拜めないが、風が吹くと、そのオフィスの窓に吹き込む風の音が、浸み込むやうに傳はつて来る。お葉はその音を聞きながら、幼い時聞き慣れた波の音の思ひだしては、軽い郷愁を唆られるのだつた。

ことり、と階段を上る足音にはつと覺まされて、馬鹿なあたし、と自分を嘲つてみたが、今日はいつもと違つて、やはり割り切れない感情が残つて、二階に上つて来た妙子にも、變な挨拶をしてつた。

お葉は無意識と云つていゝくらゐに、讀みさしの本を素早く袖に入れると、は入つて來た妙子を、何氣ないやうにして見上げた。然し妙子の屈託のなさうな眼差しに會ふと、私は何だつて隠したりなんかするんだらう、と佯びたい氣持が湧いてくる。

妙子が女學校まで行つてゐたといふ負目をいつも漠然と感じてゐるお葉は、たつた一人と云つてもいゝ友達と名の付く妙子にも、時々露骨な感情を現はしては、その都度後悔に似たものを感じる。しかし素直に謝り切れない質だつた。今も自分の幼稚な頭で本なんか讀むのが恥づかしくて隠したりして、二人坐つても落着かなかつた。

——あなたは此頃どうかしてゐるんぢやない？

と、聞かれてお葉は黙つてゐたけれども、此頃少しぼんやりした時が多くなつた。

——本なんか讀むからよ。

と言はれて、

——なんて？ と、無意識に問ふたけれども、圖書をさゝれて赤くなつて了つた。

——あなたは、まさか……と妙子は意味あり氣にお葉の顔を覗き込んで、何か云ひたげてあつたが、お葉の迷惑さうな眼差しに氣付くと

——あゝ、私はお湯に行つて來なくちや。と、巧みに外して、後も見ずに、とん／＼と下りて行つた。

お葉は一人になると變な氣持になり、鏡臺の前に坐つて飽かず自分の顔を眺めた。顔の吹出物が氣になつて、それを見てゐると、大人になつてゆく印を見るやうで、重大めいたものを感じる。あと十日もすればあたしも十九になる。十九の春か、十九の春と繰り返してゐると、をかしさがこみ上げて、鏡の自分に向つて、笑ひかけた。

年の割に老けて見える事はこんな商賣をしてゐるからには仕方ないとして、無邪氣に笑ふ時には、何か子供だなど

云ふ感じが先に立つ。それでも、やつぱし時々は苦汗に似たものを嘗めさせられるだけに、唇から受ける感じには理智的な強い所がある。

所が、今日自分でもわからない位にセンチになつて、あんたはまさか……と云つた妙子の言葉を思ひ出して、戀なもんか、あたしには戀なんか出来ない、と幾ら否定してみたつて、甘美な夢が離れきれない。庇の所から僅か見える空を見上げると、師走の風にあふられて、雲が心のやうに忙ただしく過ぎてゆく。見てみると、いらだたしくなつて、下に行かうとして階段を下りかけたけれども、男の客が二三人あつたので、又あと戻りして鏡の前に坐つた。いつもならさうでもないのだけれども、お葉は今日は話す事がとてもいやだつた。折角いゝ氣持になつてゐるのに、マダムの高い笑聲に眉をしかめて、クリームを無暗にすりこんだ。

夕方近くなるとお葉は急がしくなる。大急ぎでお湯をすませると、炊事をしなければならぬ。女中一人ゐないこの店では殆どお葉一人が下働きに廻るのであるが、面倒なので食ふものといつたら、有り合せの竹輪くらゐの貧弱な夕飯だつた。慣れてゐるので、女給たちはがつ／＼食つて、大して不届にも思つてゐなかつた。お葉もお茶漬を大急ぎで済まし、後片付けをすると又化粧しに二階に上つた。今夜は思ひ切り固白粉を塗つてみたが、何だか商賣女——ほんとはさうだが——みたいで、やはりいつもの水白粉の方がさつぱりする。こんな商賣はしてゐても、商賣女だとは自分でも思つてゐないし、さう思はれたり、云はれたりするのが、仕方のない事ながら、口惜しい氣がする。

十二時過ぎやつと店をしまつた。いつもながら最後の客を送りだすと、何となくほつとして重荷を下したやうになる。そしてその後ではきつと頼りない淋しさが、心の何所かにひつそりとして来る。心なく騒いだ後にくるあの頼りなさに、ネオンの光が妙に冷く思はれて、お葉は一瞬間ぼかんとする。

ふと氣がつくと、妙子が蒼くなつて苦しうにしてゐる。

——酔つたの？

——少し。でも大した事はないよ。

妙子は元氣さうに云ふけれども、それでもふら／＼した足取りで二階に上つた。お葉は折角親切氣を出して言つたのに、つき放されたやうな氣がして、ちよつといやな氣持だつた。そしてどんなにしたつて、二人の氣持がしつくりしないのが齒がゆい程だつた。人の親切も知らないで、と、妙子を下から見送りながら少し怨んだりするのだが、妙子の吐いてゐるやうな聲を聞くと、直ぐ驅けて行つて介抱してやらねば氣がすまなかつた。そして吐いたものゝ後仕末から妙子の床まで敷いて寝かした。

——いゝよ、わたしがするから。大丈夫よ。

と、わざとらしい元氣さを裝つてゐた妙子も、床に就くとぐつたりとなつた。白い額のあたりに後れ毛が二筋三筋垂れてゐるのが、いよ／＼妙子の顔付をしんみりとさせるやうで、女同志の淡い同情さへ起つて来る。それに家庭的な苦しみと共にしてゐるだけに、酒でも飲んで紛らさうとする妙子の氣轉がわからないでもなかつた。いや苦しい氣持はわかり過ぎる程わかるのだけれども、わからないのは、妙子がお葉に對して殊更に元氣らしく振舞ふ事だつた。又さう振舞はれてみるとお葉にも變な意地が出て来て、やつぱし普通なみの感情のない交りになつて了ふのだつた。

妙子の素振りが此頃何かなしに落着きを失つたやうな氣がする。それは女らしい敏感さからすぐわかつた。

——できてるのよ。

——誰だつて同じさね。

——どんなに威張つたつて、あの道は別さ。

——ほゝゝゝ。

妙子の居ない前で、女給等のそんな嫉妬に似た話を聞くと、お葉も急に胸がつまつてくる。誰と云つて頼る人もないお葉は、近づき難いながら實の姉みたいな氣もする、その妙子の愛が男と云ふ第三者に移つて行く事に、身をそがれるやうな空虚さを覺えた。さう思つてみると、此頃の妙子の素振りが事々にお葉につれなく思はれ、お葉は淋しいと云ふよりも、人の心といふものに對して實にいやな氣持になつた。誰もあてにはならないんだ。やつぱし私は自分で守らなければ——とさうした、いつもながらの言葉を繰り返しては、少しづつ卑屈になる。

お葉は卑屈になるまいとは思ふものゝ、仕方ない事と、あつさりして了ふより外ない。それで、誰にでも——異性には殊に——心からは親しめず、二人話してゐてもすぐ冷いものが流れるやうに感ずる。今まですつと虐げられて來ただけに、心の底には時々冷い眼が光つて、自分でも一途になれない時が多い。誰からか、アイス・モナカと云はれた事があるが、外が美しくして中が冷い意味ださうだ。随分人を見くびつてゐる。私だつて戀する時には、と云つてやりたい。唯そんな時があるか知らんと、心細いやうな、甘ずつばい氣持に襲はれる。

口では云はないまでも、お葉は妙子を本當に思つてゐるから、甘へてみたかつた。外出しようとする妙子に——何所行くの？

妙子は返事をする代りに、糸切齒をちよつと覗かせて笑つた。お葉はその瞬間、戀する者は傲慢だなと思つた。わざとさうしようとは、思つてゐないのだらうけれども、何か思はせぶりな所が氣障で仕方がない。氣まづい思ひで、ふつと黙つたお葉にも氣付かぬ氣に

——夕方は歸るから濟まないけど御飯は炊いてゐてね。

それでも黙つてゐるお葉に

——ほんとに濟みません、ぢや、ちよつと行つて來ますよ、さよなら。

と、体をくねらして出て行つた。体が細いので後姿がよい。ふん、自分一人いゝ氣になつて、何が濟みません、だとお葉は、ぼんやりと妙子の姿を見送つた。

お葉はそんな時急に淋しくなる。そして、その淋しさは、云ひやうのない、いらだたしさに變つて、氣がついた時には、手に持つてゐた、紙をもみくちやにしてゐた。それから紙をちぎつて捨てた。

夕方妙子が歸つた時、みんなは御飯を食べてゐた。妙子はその前を通つて二階に上りかけた時

——御飯は？

と、マダムが少し劍のある聲で云つた。

——今日は、外で……

妙子は、シヨールも脱がずにそのまま二階に上つた。顔色がよくないのを、お葉だけがそつと氣付いた。

——ふん。

と、女給の一人が上眼で後姿を見送つた。

——一生懸命になつてゐる時は、何と云つたつてわからないんだから。

とマダムも美しい眉のあたりをひそめた。生地の白いのが變に印象的で、小供はあるけれども、まだ女らしい初々しさを失つてはゐなかつた。美貌故に。そんな世間並の言葉に従ふならば、ほんとに美貌故に、こんな社會の女となつた、といふ感じがする。お葉はマダムと呼ぶけれども實の姉なのである。姉は十七の時家を出たきり家の面倒も見らず、今もお葉を働かす事さへ、さして氣にしてゐなかつた。お葉は放逸に近い姉の態度を批難する氣にもなれず、自ら

は女給の身に甘じて、家にも仕送りした。家には父と霧枝と云ふ妹があつた。お葉は妹を母がはりになつて可愛がり、自分が苦しんで来ただけに、せめて妹だけは伸々と明るく育てゝやりたかつた。その爲には、自分の幸福も要らず、妹を幸福にしてやる事ができれば、それで自分も満足して行けると思つた。

御飯食へてる間も落着かず、お葉は妙子の何時になく沈んだ顔色が氣になつた。御飯もそこ／＼にして二階に上ると、妙子は鏡臺の前に力なささうに坐つて、ぼかんと自分の姿を眺めてゐた。お葉が来たのにも氣付かぬらしかつた。

——どうかしたの？

妙子はふり向きもせず、もとの姿勢のまゝだつた。

——少し顔色が變よ。

——さうね。

妙子は手で顚顚ニぶかみの所を押へて、

——熱はないから大丈夫よ。

と、いつもの糸切齒をちよつと覗かすけれども、元氣がなささうだつた。

——休んだらどう？

——お店？

——腰てゐたがいゝでせう。マダムにはさう云つとくから。

——さうね。

妙子は煮えきらない返事で云ひしぶつた。一日休めばそれだけ収入が少くなり、殊に妙子のやうに病身がちの者には耐えられない事なので、お葉も無理に勧める事はできなかつた。

——此頃体が悪いの？

——よくはなささうね。

——氣からだと思ふけど。

——さあ、どうかしら。ちよつとすると姉が駄目なのかも知れない。姉さんも此の病氣で死んだんだから。

——醫者に診せたの？

——妙子は黙つて首を横にふつた。

——診せたらどう。

——氣がめいるだけよ。

——妙子は鏡臺の前を離れて、窓の所に腰を下した。荷の方を見ながら

——わたしが戀してゐるの知つてるでせう。あんただけは云ふけど、私は決して浮はつた氣持ぢやないのよ。勿論カフエーなんか勤めてゐるからにはさう思はれたつて仕方はないけど……

——お葉は黙つて聞いてゐた。妙子の氣持はやつばし、お葉の氣持に似かよつてゐた。妙子が普通のこんな所に働くやうな女でもなく、もつと精神的な高さを持つてゐる女だと云ふ事をお葉も知つてゐた。だからお葉は勿論妙子の純心さも疑はず、妙子の選んだ異性さへも疑ひたくなかつたけれども、たゞそれが幸福な道だらうか、とちよつと不安になるのだつた。けれどもお葉には、いゝ事か悪い事か、とても云へなかつた。お葉にはまだ異性に戀する心の餘裕も、物質的なゆとりもなかつたので、戀といふ世界をまだ幻の世界に置いてゐた。だから、私だつたらもつと／＼熱烈に戀するんだと夢見てはゐるが、實際の場合、そんな時が一度でもあるだらうかと思ふと、妙子のその氣持が羨しくも思はれてくる。

—私はどうなつたつていいの。

妙子は、ぼつんとこんな事を云つた。

—わたしは体が悪いでせう。いつも死ぬ事ばかりかし思つてるもんだから、死んでも悔いないやうな氣持に、心から浸つてみたいの。戀する女の氣持は眞劍よ。

—眞劍にならなくちや、戀はできないのぢやない？

お葉は自分の不純さを分析されてゐるやうな氣持がしたので、逆襲した。

—さうね。

妙子はあつさり折れて、

—あたしは今日は休まう。やつぱし私は死ねないらしい。

と笑ひながら立ち上つた。お葉も手傳つて床を敷いてやつた。街はもう暗くなつて、師走の寒さが急に身に浸んで來た。お葉は正月を迎へる爲に働かねばならなかつた。それに霧枝にも晴着を買つてやりたかつた。

○ ○ ○

私も十九になつた。一人の旅をしみじく思ふ。もや／＼と立ち籠めた霧の中に居るやうな、頼りない氣持、けれど、霧の微粒子をそつと唇にあてゝみたいやうな甘すつばい旅を思ふ。

夜が明けても、白けきつたこの世界では、何時もの陰鬱な氣分が抜けきらない。雨戸を閉めきつた仄暗い女給部屋には人いきれが立ち籠め、元日の新しさは何所にも見當らない。伸び切つたやうな体が、五つ蒲團にくるまつて轉つてゐ

る。兩戸から洩れる日差しが愛子の瘦顔を斜に横ぎつてゐる。お白氣のない顔がまるで土で作つた人形のやうに、彈力のない皺が纏つてゐる。生活に疲れた姿。

見てゐると反撥的に私はびち／＼と生きてくなる。ふつと母が戀しくなる。何といふ動機もないのだが、こんな時無精に母が戀しい。六年前に死んだ母の姿が昨日のやうに思ひ出されて来る。お母さんが今の私の姿を見られたら何と思はれるだらうか。きつとこんなになつた事を悲しまれるだらう。けれども生きて行く爲に強く働いてゐる私を、何所かで見守つて下さるやうな氣がする。赤いドレスがもの悲しい。

× × ×

元日以来急がしい日が續いたので、氣分を變へる爲に田舎に行く事にした。一緒に行つた妙子と話してゐる中に、一時間の自動車が十分程に短かかつた。

—あなたのお母さんなんか死んだつて懐しいだらうけれど、あたしなんか母が居ながら、憎みあつてるんだから。

—此頃便りはある？

—手紙なんて……書くには書くけど、出した事はないわ。どんな事情があつたつて小供を置いて離縁するやうな女を、お母さんとはどうしても思ひたくないの。

—だからあなたはぐれたの？

—そんな單純な問題ぢやないのよ。ぐれるなんて眞當云へば贅澤な感情よ。私がこんなになつたのも食へなかつたからで、今でもそれが根本原因よ。動機と云へばSの事もあるけど、あの事ばかりでは、かうはならなかつたと思ふの。

—どう、こんな社會の事。

—あたしには少し神經を使ひ過ぎる。

——あたしは何とも思つてゐないの。

——あなたには少し圖太い所があるのよ。その癖土人の女のやうに、情熱が沸いてゐさうで、あなたは戀したら一途になれる質よ。

——あたしが？

——さう見えるわ。あたしは感情が強いだけにすぐ參つちまふの。所があなたは、何時も見てゐる私にだつてわからぬ位、理性を働かしてゐるのぢやない。あたしの戀が情の戀ならば、あなたの戀は理性の戀よ。それだけ、あなたの方が強いよ。

——さうかしら。あたしはこれでも何にも考へてゐない積りなのに。と私は答へた。

話は何時の間にかSの事に落ちてしまつた。純情家同志の戀が巧くいけばいよ。

田舎は何時見てもいよ。私の故郷はあこがれと同じ意味位に素晴らしい。手に抱へきれぬ程の枝を摘みとつた椿の木。一匹の鮒を擲へる爲に一日中は入つて居た小さな池。小川。毎日々々通つてゐた學校への崖道。ばら／＼と落ちて来る木の葉の音。恐しさの餘り驅けだした事のあるあの薄暗い山道。夜になれば切紙のやうに月の浮び上つた森。私は久し振りに母の墓に參つた。

——あなたのお母さんの供養をして上げた方が、どれだけせい／＼するかわからない。

と妙ちゃんも云つて呉れて、氣持が急に明るくなつた。田舎に來れば誰だつて單純になるらしい。風吹かば吹け。こんな暮し方もいよと思ふ。誰からか習つたのにこんながある。

今日の日もぼうふり蟲よ明日も又

x

x

x

愛子が支那に去つて女給が足りなくなり、急に忙しくなつた。迫つて来る事變の波に押されて流れでて行く姿は、華々しいやうで心細い。所詮は金と自由の爲、けれどおぼつかない未來ではある。行先は北京だと云ふがそれさへ何所かわからない。さう思つて見ると憎んでゐた愛子ながら、内心氣の毒でもある。田舎には子供さへあり、何人かの男を渡つて来た愛子も、いざとなると眼をうるませて悲しさに古行李を抱へて出て行つた。

——体だけは大事にね、金なんかどうでもいゝぢやないか。体さへ達者ならどうにかなるよ。

とマダムが別れの言葉を云つたが、道づりの人に話しかけるやうな、感情のない言葉だつた。他のもう一人の女給が——いゝ男でも見つけなさいよ。

と冗談に云ふと、眞顔になつて

——もう男は懲りく。

としんみりした調子になつた。それから隣にでも行くやうに身輕に發つて了つた。この世界では女給の入れ替りなんか、三度食べる御飯みたいに感情のない事なのに、今迄ゐた者が居なくなると、ちよつと淋しい。

——あゝあ、私も大陸にでも行くかな。

とマダムが云へば、それから大陸論に變つて了つた。みんないゝと云ふけれども、私には信ぜられない。つらいながらかうやつて働いてゐれば、家の方も見てやれるのだから、餘り大きな事を望まない方がいゝやうに思はれる。それにどんな事があつても、ぢつと懲へてゆくやうな私の性分からして、金を貯めて派手に生きたくはない。私の理想はこんな生活でなしに、小さいながら家を一軒持ちたい事。それには矢張り田舎がいゝ。私が田舎々々つて餘り自慢するものだから、みんなから笑はれる位、私は田舎の生活が戀しい。百姓したつていゝ。

風邪かぜが流行つてマダムが寝るし、妙子も昨日から休んだりして心細い。それに私まで風邪氣味だけれど、今私が寝つ

いたら、と思ふと病氣なんか精神力で治すんだと力んでみる。妙ちゃんの風邪はさう重いわけではない。けれど茶碗なんか割つたりなんかするものだから、私はビクツとする。

— 何にも考へたくない、どうなつたつていよよ。

と妙ちゃんが云ふから私は不眠さうに云つてやつた。

— どうしてそんな事云ふの。あなたは自分の身が可愛くないの。

— 可愛いともあんまり思はないわ。

— 死ぬ程思つてるの？

— さあ。

妙ちゃんは笑つて首を横に振つた。

— 死ぬ程の勇氣があつたら、私もとくにどうかしてゐただけれど……私が考へるのは矢張りお互が幸福になれるかどうか。

かう云ふのはね……。

それきり、黙つてしまつた。後を続けさうになかつたので

— 何なの？

と聞いたのに、それにも黙つて答へなかつた。暫く——三分位——黙つてから、やつと聞きとれる位の聲で

— 私には階級的な悩みがあるの。

妙ちゃんの云ふ事がよく呑み込めなかつたものよ。

— それくらゐ。

と力付ける爲に云つてやつたら、

——それくらゐぢやないのよ。

それからもつと低い聲で

——わたしはね。部落の……。

人の不幸などと云ふものは、人の及びもつかない所にあるものだ。

三日店を休んでゐる妙ちやんに私は藥屋から藥を買つて持つて行つた。妙ちやんは眠つてゐた。枕許に水を置いて何氣なく寢顔を見たら、何だか眉のあたりが引きつゝて見えた。若しかしたら身体に……とそんな考へがすつと驅け巡つた。けれども私は思ひ返して、妙ちやん程の學問もあり固い人がと、自分の取越苦勞を笑つて過した。

無心に眠つてゐる。寢顔のいゝ人は心がいゝと云ふけれども、無心に眠つてゐる顔を見れば、氣がしんと落着いてくる。夜だつたが、十五燭の電燈が今夜に限つて暗いやうで、何だか死といふものを豫感させる。

この先妙ちやんがどうなつて行くのか。と同時に、妙ちやん程に身に藝のない私も、將來どうなつて行くのか、と思ふと、今まで無意識に過して來た土臺が根本から揺れるやうに感ずる。ばさりと軒端にしぶく音は降り積つた雪の落ちる音か。

私はこれでも樂天家の積りでゐる。私は妙ちやんの云ふやうに何所か圖太い所がある。小さい時から家庭的に苦しみ通して育つて來たので、減多に驚いたり泣いたりするやうな事もない。何か心配事があつても、それがどうにもならな

いとわかると、すぐ他の事に氣を紛らして了ふ。さうでもしなければこんな社會ではとても神経の方が先に疲れてくる。だから私なんか、毎日ふら／＼とその日を送つて来て、ひよつと後をふり返つても、何時の間にどんな風に過したのか自分でも判然しないくらゐ、ぼんやりした日を重ねてゐる。

妙ちゃんの性格には何所か苦しみで裏うちされてゐない弱さがある。色々な複雑な家庭の事情やら階級的な負目ひびきは持つてゐるにしても、小さい時から割合甘やかされて育つて来ただけに、氣は強くても何所か弱々しさうな感じがする。色白で瘦せた姿を見ただけでもそんな感じがすつと傳はつて来る。

二人は決して交る事のない平行線の上を歩いてゐる。びつたりと交錯する時がないだけに、それだけ離れて行く時もない。いつも同じ位な間隔を置いて二人は歩いて行く。

妙ちゃんが寝ついてから一週間目、田舎に靜養に行く、とマダムに行つたまゝそゝくさと出て行つた。私はその日用事があつて都から出てゐたのだが、それを聞いた時私は打ちのめされたやうになつた。最愛のものから裏切られたやうなほろ苦い汗を管めさせられて、私は手當り次第のものを投げつけてやりたかつた。せめて私一人位には本當の事を云つてもよささうなものを。あの人もやつぱし普通なみの女給のやうに男が出来たら一緒に出て行く人だつたのか。さうは思へない。けれど——私は万一を期待して妙子の部屋に行つた。手紙らしいものはなかつた。私はふと友情、殊に女の友情といふものが、どんなにか泡沫みたいなものであるか、思ひ出さぬわけにはいかなかつた。友情は戀愛への筋書。どうせ私達の友情なんか紙片ほどの値打もない代物なんだ。

私は知らずの／＼中に何もかも忘れてしまふ。それもほんとうに忘れるのではなくて、一時そんな状態に置かれるま

での事で、一度でも心の中に巢くつた事は、時々思ひ出す事がある。それがいゝ事だつたらいゝが、心の痛手になるやうな事なら、私はよくしらない事に決めてゐる。私が忘れるのは薄情でもなんでもなく、單調なやうで複雑の激しい一日の生活の戦ひに、意識が麻痺してしまふからである。私は近頃酒を飲む。捨鉢なんてあんな安つばい氣持でなしに私はいらくした焦慮を感じる。殊に妙子が行つてからは變な淋しさに支配されて、私はぐびぐびと飲む。飲んで騒いでゐる中に、私も女給になつてゆくんだ。私はやつぱし女給でしかあり得ないのか。いやだ。

私はその人が、Kさんが好きなのではないか。今まで私といふ女にあれほどの熱情と眞面目まで近づいて呉れた人が一人でもあつただらうか。あの人は若々しい熱情に燃えてゐる。その人にまで嘘をつかねばならない私かと思ふと、私は自分で情なくなる。

——僕はあなたが好きだ。まだ生活能力もない僕にはこれが全てだ。しかし好いてゐるばかりに、あなたのそんな矛盾の多い生活を見てゐると氣がつまるやうに思ふ。あなたはまだ信ずる事ができないんですか。

私には、信ずるとか信じないとかは、問題でない。私にはもつと現實的なものが重くかぶさつてゐる。假令信ずるとしても今の私になにができる。私は家の世話をし、妹の面倒を見なければならぬ。私にとつて戀は恐ろしい魅惑でありながら、近づき得ない現實が生々しく横たはつてゐる。私もあの人が好きなのかも知れない。けれどその好きといふ事が現實に向つてどんな武器となる事ができよう。私はやつぱし現實に引きづられてゆかねばならない。宿命を負つてゐる女なのか。

X

X

X

輕々しく人を疑ふ事がどんなにか悪いかといふ事を私は今日知つた。一時でも妙ちやんを疑つてゐた自分のあさましさが悔められる。私は妙ちやんの手紙を見て始めて、あの人も亦眞剣に戀してゐた事を知る事ができて、人の心を信じ

まいと盟つた自分の心の頭迷さを笑ひたくなる。

あの人の爲に小供を生んでもそれが不幸だと知つてゐる私は、あの人に知らせないまゝに身を引く方があの人の爲にも、私の爲にも幸福だと思つたの。それに私は肺が悪くて餘り長い生命でもなささうな氣がして——今迄思はない事でもなかつた。が、かうはつきり現實を掴まされてみると、遠い空から降つて來た隕石に頭を刺されたやうに思慮が混亂してくる。そして戀といふ感情の前には因習とか理性とかが煙のやうに消えてゆくのを感ずる。道徳的に見て妙ちやんの仕打は間違つてゐたかもしれない。けれども現在の妙ちやんの氣持は、どんな惡魔だつて責めきれないだらう。私は妙ちやんに假令父親の愛情がどうあらうと、繼母の仕草がどうあらうと、我家よりいゝものはないから、ちつと忍んで現在の生活を續けた方が、あなたの身体にも生れてくる赤ちやんの間にもどれだけいゝか知れない。黙つて飛び出し又歸らねばならなかつたあなたの胸の中がどんなに苦しいか、私にはよくわかるけれど、あなたは女給なんかする身分ぢやないの、ちつと苦難に耐へ忍んで生きてゆかれるやうにと、私は眞心籠めて書いた。書いてゐる中に私も眞當の事を書いてやらねば氣が濟まなくなつた。然しこんな時、Kの事を知らせてはならないやうな氣がして、書きはしなかつた。書きはしなかつたが私が最早やKの熱情に惹かれてゐる事は事實だつた。私はもう本當にKを愛してゐるのかも知れない。かうなるまでに私は何度かKの心も疑ひ、私の心が感情に欺されたのではないかとも思つたものゝ、あの人が愛し、私が愛してゐる事に間違ひはなかつた。

x

x

x

私は熱愛と云ふ言葉を知つてゐる。妙ちやんが云つたやうに私は土人の女のやうな情熱であの人を愛した。この二十日といふもの、一月から始めた日誌でさへ何にも書けない程私はあの人を愛した。

うら悲しいジャズソング。或る事情で暫く別れねばならなくなつた今日、私はしみじみとあの人の事を思ふ。

家の裏と表から春雨が音もなく流れこんできて、ガラス戸にはしつとりと濡りが下りた。金文字のは入った扉に私は當もない字を書いては消して、心地よい指の感觸を指先に感じてゐた。扉越しに私は思ひがけぬ人妙子の姿を見た。思ひ違ひではと思ひ返したが、あの八重齒で笑ひかけて來た。

——妙ちやん。

全く不意だつたので私はその後の言葉が續かなかつた。

——驚いたでせう。

私達は人の居ないボックスに向ひあつて腰を下した。以前より少しやつれてはゐるが、血色は幾らかいゝやうにも思はれる。

——瘦せたでせう。心配したもんだから。

私は妙子の凹んだ眼のあたりを言つた。

——肉体的にはさうもなかつたけれど精神的にはね。それに色々なるさい世間の眼があつたり、繼母への義理があつたり、今思ひ出してもいやな事ばかり。

妙ちやんは下を向いて

——でもね私がSを好いてゐたのは本當よ。こんな氣持はわかるかしら。

——妙ちやん。

私は云つてやつた。みんな何もかも云つた。私がKを知つた事も云つた。

——私もKを熱愛したわ。今も愛してゐるわ。愛してみ始めて、私はあなたの苦しい氣持がわかつたやうな。私たちが

此んな所に居るからつて類推する世間の眼を、私はたまらないやうになつたの。私は家庭の事情さへ許すならこんな商賣は早く止めてしまひたいの。勿論變に思ふ人には思はれたつて構はないわ。だけど私も、あなたにだけは、本當の事を云つて置きたかつたの。

私は云つてゐる中に譯のわからない涙がこぼれて來て胸がつまつた。姉にも洩らした事のない涙だつた。

——あのね、私の取つた道は間違つてゐたわ。どんな眞實一路の旅だつて、世間と云ふものには許されない掟があるのよ。あたしのやうになつたら今まで見くびつてゐた道徳心に責められて、やつぱし苦しいの。あなたは眞實一路つて讀んだ事ある？

私は黙つて首を横に振つた。

——子供の世界だけど、眞實一路の旅が現實といふもので壞れてゆく姿が、私の胸に變に浸み込んで來るの。

私がおか云はうとするのを遮つて

——さうよ。眞實一路の旅は正しい事よ。愛情も正しい事よ。けれど私にもわからない。間を置いてぼつんと、
——生きるといふ事も難しいのね。

と頭を垂れた。生きるると云ふ事も難しい。私もその言葉を口の奥に噛みしめて、眞實一路の旅を思ふ。